

# 神戸高商の開校のころの会計帳簿\*

## —和帳から洋帳への転換—

岡部 孝好

(神戸大学名誉教授)

\*初出:「経営学研究のために」(神戸大学経営学部、2002年)。

### 1. 100年前の試練

会計帳簿に記録するのは数字や符丁(借方、貸方、勘定科目などの記号や番号)ばかりだから、この帳簿記録に一番向いているのはコンピュータである。会計帳簿とコンピュータは相性がいい。それなのに、会計帳簿への記録をすべてコンピュータに任せて、紙のメディアから磁気メディアへ完全に転換するのは、けっしてなまやさしいことではない。「ペーパーレス会計」に向けた戦いはすでに何世代も前からすすめられているが、その完結はまだまだ先のことらしく、血のにじむような苦闘がいまもつづけられている。

しかし、日本の会計にとって、このような苦闘は最初の経験ではない。およそ100年前、神戸高商が誕生した明治35(1902)年ごろにも、同じような、いやそれよりももっと厳しい試練の時があった。まだ文明開化の波に洗われていた当時、わが国の企業は、和帳(大福帳による日本式会計帳簿)から洋帳(西洋式会計帳簿)に乗り換えることを迫られていたのである。

和帳は漢字の数字をタテに書くが、洋帳はアラビア数字をヨコに書く。この表面的な相違よりもっと本質的なのは、和帳は単式簿記法なのに、洋帳は複式簿記法によるという違いである<sup>(1)</sup>。明治時代にはこの複式簿記の知識がきわめて希少であったから、神戸高商出など、超エリートを雇える優良企業でなければ、洋帳を使うといった贅沢は許されなかった。問題は、そればかりではない。当時においては、洋帳を採用しようにも、そのための帳簿

用紙も、またペンもインキも、わが国にはまだ存在していなかったのである。明治時代の先輩たちは、想像を絶するこの試練を、いったいどのように乗り越えたのであろうか。今年の平成 14(2002)年は神戸高商の開校から 100 周年日にあたるから、この記念すべき年に、会計ツールの側から当時の会計帳簿を追ってみることにしよう。

## 2. 明治時代の筆記具

### (1) 鉛筆

筆と墨しか使ってこなかった日本人にとって、文明開化とともに流入してきた西洋の筆記具は目を見張るものばかりであった。わけても鉛筆と万年筆は斬新で、新しがり屋にとって垂涎の的であった<sup>(2)</sup>。

西欧ではつとに鉛筆工業が確立されていたのに、明治 10(1877)年代になってもわが国にはまだ鉛筆の製造技術はなかった。明治 14(1881)年に開かれたパリの内国勸業博覧会に、井口直樹が手製の鉛筆を出品しているというが、これはおそらくは試作品程度のものであろう。この鉛筆の国産化に果敢にチャレンジしたのは、真崎仁六(三菱鉛筆の創始者)である。真崎仁六は苦心惨憺のすえに、明治 20(1887)年ようやく鉛筆らしきものの製品化に成功したが、その芯は、石臼でついた黒鉛と粘土を、摺り鉢で練り合わせたものでしかなかった(『鉛筆とともに 80 年』、1965)。しかも、それは三方の軸で芯を囲む「はさみ鉛筆」であったから、力を入れて書くと芯が引っ込むという欠点をもっていた。このため評判はすこぶる悪く、明治時代の全体を通じて鉛筆は一般に普及せず、毛筆があいかわらず幅を利かせていた。

明治の初めから舶来鉛筆がさかんに輸入されていたが、それは製図、図画、速記などのための特殊な器具であった。明治の末ごろには国産鉛筆がようやく愛用されるようになるが、国産化されても、この簡便な筆記具が会計ツールとして広く使われるようなことにはならなかった。鉛筆の文字は消しゴムで簡単に消え、改ざん(竄)されやすい点が嫌われたのである。なお余談になるが、磁気ディスクは現代の最も重要な会計ツールであるが、これにも、

消しやすいという鉛筆と同じ欠点がある。

## (2) ペンとインク

毛筆と墨で、和紙に書かれた文字は、改ざんがむつかしいうえに、保存がきく。防水性も高く、江戸時代の商人は、火事の炎が迫ってくると、大福帳を井戸に投げ込んで逃げたという。和紙に書かれた毛筆の文字は、濡れても、後で乾かせば元通りに復元する。西欧の鉱物性のインキにこれほどの防水性があったとはとても思えないが、洋紙にペンとインキで書かれた文字が永く保存できるものであったこと、それに改ざんされにくいものであったことに疑いはない。そのうえに、アラビア数字は、ペンとインキを使って横書きにする方が書きやすく、滑りがいい。こうした長所を備えていたために、早くも明治 10(1877)年代には、先進的なごく一部の企業では、横浜の貿易商社を通じて鉄鋼ペンと西洋インキを直輸入し、これらの舶来文具で洋帳に記録していたという(ちなみに、日本最初の洋式帳簿は明治 5(1872)年に国立銀行によって採用された収支計算帳だといわれる)。現存する明治 20(1887)年の丸善唐物店(いまの丸善)の相場表(商品リスト)には、石鹼、マッチといった当時の高級生活用品にまじって、鉛筆、ペン先、インキといった西洋文具が記載されている(『丸善百年史』、1980)。

明治時代の会計ツールの中で、製造技術が比較的簡単であったのはインキである。明治 10(1877)年代になって洋帳が普及しはじめると、このインキの消費量が増えてきた。そこで丸善は、インキの製法に詳しい安井敬七郎(日本初のソース工場「神戸ソース」の創始者)を社員に招き、その国産化に挑戦しはじめた。明治 20(1887)年に丸善工作部から販売された「簿記用インキ」はその輝かしい成果である。この和製インキはのちに改良されて「丸善インキ」に、さらに大正 5(1916)年には「アテナインキ」となり、日本を代表するインキの人気ブランドに成長した。ただ、当時の国産インキの品質は粗悪で、輸入インキにはとても太刀打ちできなかった。当時の洋行みやげに鉛筆とインキが多かったのは、西欧製が品質面で格段にすぐれていたことによるものである。

## (3) 万年筆

明治時代における万年筆は、上流階級の「ハイカラさん」が遊ぶ奢侈品で、会計ツールとはまったく無縁である。しかし、万年筆は鉄鋼ペンとインキ壺を合体させた複合商品であり、会計ツールの製造技術と切っても切れない関係にある。明治 10(1877)年代に輸入されていたのは「スタイログラフィックペン」と呼ばれる原始的な万年筆で、細い金属パイプの中に針金を通し、その上下操作でパイプの先端にインキを送る仕掛けになっていた。明治 20(1887)年代になると、「ウォーターマン」という毛細管現象を応用した本格的な万年筆が輸入されはじめ、これが西洋かぶれの文士などの間で人気を呼んだ。この需要を受けて、明治 40(1907)年ごろから万年筆の国産化がはじまったが、耐磨耗性のペン先を製造する技術がわが国にはまったくなく、金ペンだけは輸入にたよった。東京商船学校教授の並木良輔(パイロット万年筆の創始者)は、この状況をみて金ペンの研究を思い立ち、羅針盤の支持ピンにヒントをえて、ペンの先端に耐磨耗性のイリドスミンを焼き付ける技術を開発した(『パイロットの航跡』、1979)。しかし、この国産万年筆の商業生産がはじまったのは大正 7(1918)年というから、鉄鋼製のペン先に関しては、明治時代には幼稚な製造技術しかなかったといえよう。インキは低品質でも国産品があったが、洋帳に使えるような国産のペン先はわが国にはまだ存在しなかったのである。

### 3. 明治時代の洋帳

#### (1) 明治時代の帳簿用紙

明治維新のころ、わが国の製紙技術はすでにトップレベルにあり、手漉き和紙ほど良質の紙は世界のどこにもなかった。この和紙は壁紙、障子、襖、衣服、傘などに広く使われており、全国各地に生産拠点があった。しかし、和紙にマッチする筆記具は毛筆だけで、鉄製のペン先とは特に相性がよくなかった。

西洋文化の流入とともに洋紙に対する需要が急増したため、明治 6(1873)年に渋沢栄一などによって王子製紙が設立されたが、生産された洋抄紙は新聞用紙など、印刷向けの低級品であった。明治 20(1887)年ごろには、原料はボロ布からパルプに切

り換えられ、洋紙の供給体制が整ってきたが、これらの国産洋紙は均質ではあっても、品質が悪く、ペン書きの会計帳簿には不向きであった。

洋帳向けの帳簿用紙の国産化はずいぶんと難渋し、大正の初めになってもなお試作の段階にあった(『コクヨ70年のあゆみ』、1975)。コクヨの創始者黒田善太郎は土佐製紙(いまの日本紙業)に特に依頼して、インキでも書ける特製の和帳を製造しようとしたが、その生産も販売もはかばかしくなかった。このため、大正2(1913)年になってコクヨが洋帳の既製品の製造に着手したときにも、用紙だけは輸入ものにたよるほかはなかった。コクヨが王子製紙小倉工場で洋帳向けの「コクヨ帳簿紙」の開発にはじめて成功したのは、なんと昭和5(1930)年になってからのことである。明治時代全体を通じてみると、洋帳の帳簿用紙はすべて輸入ものであり、国産品で使える用紙はどこにもなかったとみなければならない。先に述べた丸善唐物店の相場表において、直輸入の主要品目の1つが「簿記用紙」であったことも、この点を裏付けている。

## (2) 明治時代の会計帳簿

この簿記用紙がどのように使われたのかははっきりしないが、輸入されたのは赤い罫線を印刷した文字通りの「用紙」であって、「帳簿」ではなかったのはたしかなことである。したがって、製本は国内で行う必要があったが、これを請け負っていたのが「帳簿屋」である。銀座の伊東堂や文祥堂、横浜の文寿堂などがこの帳簿屋で、西洋の製本技術を使って「別誂え品」を特製していたという(『コクヨ70年のあゆみ』、1975)。

明治時代の洋帳はほとんど全部がこの特注品であるが、時代が下がるとその装丁はしだいに凝ってきて、威厳に満ちあふれたものになった。輸入帳簿用紙はもともと高級品であったが、それが西洋の貴重書の製本技術によって重厚に装丁された。帳簿の断ち口にはしばしば鮮やかな縞模様(マーブル)が描かれていたし、背皮には風格のあるインド産羊皮(ヤンピー)が張られ、そのうえに金箔で背文字が押されていることもめずらしくなかった<sup>(3)</sup>。ただ、仕立てには関東風と関西風の別があり、東京では黒染めの背

皮に「～元帳」という背文字が押されたが、大阪では赤染めの背皮に「～原簿」と刻まれるのがふつうであったという(『コケヨ70年のあゆみ』、1975)。

#### 4. 和帳の全盛時代

明治 32(1899)年に商法(法律第 48 号)の第 25 条に、「商人ハ帳簿ヲ備ヘ之ニ日ノ取引・・・ヲ整然且ツ明瞭ニ記載スルコトヲ要ス」という規定が設けられた。会計帳簿の作成を義務づけたこの条文はわが国のビジネスの近代化にとって画期的なもので、100 年余の星霜をへて、いまなおそのまま活きている。しかし、この条文が洋帳の普及を狙ったものであったとすれば、かなり無謀な会計規制であったことはまちがいない<sup>(4)</sup>。洋帳を作成しようにも、その会計ツールが国内にはまったくなかったし、複式簿記の知識もまだ普及していなかった。神戸高商が開校し、ようやく簿記教育に力を入れはじめるのは、3 年後の明治 36(1903)年になってからのことである。当然の結果として、新商法が施行されても、洋帳はいっこうに増えず、会計規制のインパクトらしきものは、何も残らなかった。大多数の企業では、従来とまったく同様に、墨と筆で、大福帳に「整然且ツ明瞭ニ」記載しただけのことである。

和帳は 100 枚程度の和紙の束を表紙で挟み、紐でとじる。黒田善太郎がこの和帳の表紙を製造販売しはじめたのは、明治 38(1905)年のことである。新商法施行 6 年後のこの年でも、和帳の需要は旺盛であったとみえ、この表紙ビジネスは大成功であった。明治 41(1908)年になって、黒田善太郎は表紙とそれに挟まれる帳簿和紙を一体化し、和帳の既製品を販売しはじめたが、これもあたって、大いに産をなした。大正 7(1918)年に第一次大戦が終結してから、和帳の需要にはじめて陰がさしはじめたといわれるが、それまで売っていたのは和帳ばかりであった。このことから、わが国においては、商法施行後も和帳の時代が長くつづき、主要な会計ツールが墨、筆、和紙、そしてソロバンであったことがわかる。

#### 5. 洋帳への転換

大正 3(1914)年に第一次大戦が勃発し、西洋式の会計ツールの輸入が途絶した。そこでまず国内需要をまかなうために、鉛筆、ペン先、帳簿用紙などの国産化が急ピッチにすすめられた。この国産化に早く成功した企業には、さらに大きなビジネスチャンスが待っていた。西欧では戦争によって文房具の生産が止まったために、鉛筆などに海外からの注文が殺到したからである。こうして、会計ツールの国内生産体制は飛躍的に拡大した。

だが、大正 8(1919)年に戦争が終結すると、こんどは輸出の停滞により、文房具の国内価格が暴落しはじめた。小規模業者が乱立していた鉛筆業界では、過当競争によって際限もなく価格が下がり、これに対応して品質も劣化していった。人目に触れる両端だけに芯を詰めた「キセル鉛筆」を輸出し、国際的信用を失墜させたのも、このころのことである。しかし、わが国の近代文明を前進させたのは、皮肉なことに、この価格の暴落であった。価格の大幅な下落のために、鉛筆がだれもが親しめる「生活用品の文房具」に化けたのである。「一銭鉛筆」がでてから、貧しい家庭の子弟でも、鉛筆で学べるようになり、学校でも鉛筆が文具として定着した。この状況を背景に、会計帳簿にも大きな変革が起こり、第一次大戦後の不況を境に、ようやく洋帳の需要が増え、代わりに和帳の需要が下落しはじめた。この動きに拍車をかけたのが、法人所得税制である<sup>(5)</sup>。

昭和になっても和帳の需要はかなりあったというから、大正時代に日本企業の会計帳簿がすべて洋帳に切り換えられていたわけではない。しかし、区切りのひとつの目安になるのは関東大震災の大正 12(1924)年である。この関東大震災を起点とすれば、毛筆からペンへ、和帳から洋帳への転換には、明治 6(1873)年に公刊された福沢諭吉の『帳合之法』から数えて半世紀、明治 32(1899)年の商法から数えて四半世紀がかかったことになる。

福沢諭吉の『帳合之法』を端緒として、明治時代から大正時代にかけて、かなり多くの簿記の教科書が日本で発刊されていたのは事実である。また東京高商、神戸高商といった上級の教育機関だけでなく全国各地の旧制商業学校においても、教育

科目の中心に簿記が据えられ、西洋式の複式簿記が徹底的に教え込まれていたこともまちがいない。しかし、日本のビジネスの実情に目を向けてみると、複式簿記は当時ではさして普及しておらず、関東大震災以前においては洋帳よりもむしろ和帳が一般的であったことがわかる。日本の会計史を語る場合、大正末期に至るまで、複式簿記がビジネスの一般的なツールになっていなかった事実にも光を当てなければならない。

## 6. むすび

会計帳簿へ記録するには足し算、掛け算が不可欠であるが、九九の教育が普及していない西欧では、その穴を埋める機械式計算機を開発するのにずいぶんと精力をつぎ込んだ。しかし、幸いなことに、日本にはポータブルで、扱いやすいソロバンが古くから発達していて、商家の子弟などはその操作に十分に熟達していた。計算機にかんするかぎり、明治時代の日本は世界に類のない好環境に恵まれていたといえる。しかし、帳簿用紙もなければ、ペンもインキもないわが国において、和帳から洋帳へ乗り換えるというのはとほうもない難事業であり、苦しい戦いであったことはまちがいない。その戦いの旗手となって、日本の会計の近代化をリードしてきたのが、わが神戸高商の先輩たちであった。

神戸高商の開校から100年余がたったいま、われわれが直面しているのはそれとは別の計算機との戦いである。電子式計算機、つまりコンピュータによる会計帳簿の作成は「ペーパーレス化」に向かっているが、このペーパーレス化の動きは、先輩たちが苦勞のすえに打ち建てた洋帳の世界を叩き潰すことを狙いにしている。紙のメディアから電子のメディアへのこの大転換が完成すれば、明治時代に創出された日本の会計帳簿がもういちど大変身を遂げ、まったく新しい時代を迎えることになる。次世代に向けたこの戦いも容易でないが、神戸高商の先輩たちがそうしたように、われわれもまた旗を高く掲げて、この難事業を乗り切らなければならない。

《注》



1. 和帳は単式簿記であるが、その記録はかなり粗雑で、組織的な単式簿記ではなかったようである。大福帳の多くは、今日の用語でいえば掛売りと掛仕入れの補助記録簿にすぎず、現金出納帳としても不完全きわまりないものが大半であったと推定される。
2. 輸入鉛筆の歴史は古く、徳川家康が南蛮渡りの鉛筆を使っていた証拠があるという。名古屋の徳川記念館には、いまでも徳川家康が使ったとされる短い鉛筆が陳列されている。
3. 神戸大学経済経営研究所の文献センターには、明治時代に実際に記帳されたペン書きの洋帳がたすう所蔵されている。これらの洋帳には豪華な装丁が施されており、会計帳簿というよりも美術品という印象を受ける。
4. 商法が要求する会計帳簿には、複式簿記によるもののほかに、単式簿記によるものが含まれるというのは、今日でも支配的な解釈だといえよう。しかし、当時の乱雑な大福帳が、はたして商法の要求を満たすものであったのかどうかは疑わしい。
5. 洋帳への切り換えを促した決定的要因の1つは、法人所得税制である。課税標準となる「所得」なるものを周知させるために、大正6(1917)年から、税務署が全国各地で講習会を開催して、複式簿記による記帳指導を行った。これがわが国の会計事情を一変させることになるが、ここではその経緯に立ち入る余裕がない。

#### 《参考文献》

コクヨ株式会社、『コクヨ 70年のあゆみ』(1975年)。

パイロット万年筆株式会社、『パイロットの航跡——文化を担って 60年——』(1979年)。

丸善株式会社、『丸善百年史』(1980年)。

三菱鉛筆株式会社、『鉛筆とともに 80年』(1966年)。